

はぬ本尊也。亂世以後何と成るや不知處、幸ひなり申請け度しとあれども、夫人領掌し給はず。然るに夫人逝去の後、此本尊をば金澤表末寺照圓寺へ御渡相成、葛卷藏人寺社奉行たる時、此一々を利常卿の御耳に立てければ、兼ねて内々聞召しおよび給ふ也。其阿彌陀寺へ寄進可被成とて、照圓寺の後、惣構の端片原町なるを照圓寺へ賜はり、寺内へ圍ひ入れたりと葛卷藏人語る。とあり。有澤永貞が古兵談殘囊集には、金澤城本丸の御殿は昔の御堂たりしに、或時當番人屋根裏を見れば、古葛籠を釣上げてあるを見付け、番人慰みに御して明け見れば阿彌陀の像也。其像を芳春院殿へ上げ、るに、甚御悦にて、持佛堂の本尊に被成、後には表末寺へ御預け被成たり。此像は三休の名作なりと云ふ。一説には、芳春院殿逝去の後照圓寺へ預り給ふとも云ふ。照圓寺は表末寺の棟取なるが故に、諸人同時に覺えたる歟。といへり。西末寺由来記には、古へ末寺城内にあり。一旦退轉に及びける處、其後芳春院殿より、彌陀の本尊木像と百間四方の寺地を城邊に賜ふ。然るに其地邊元和元年玉泉院殿の居所と成るに依りて今の地に移轉す。と載せたり。

按ずるに、本源寺は天正八年閏三月尾山の陥りたる時城地を立退き、寺院は中絶せしかど、佛堂は其儘齋祖利常卿の時廣間となし置かれたる事、右の佛像にて知られり。其建物は二世權中納言利長卿の時まで存在せしが、慶長七年十月晦日天守に雷火移り、本丸の殿悉く延焼したれば、此時焼失せしと聞ゆ。されば彼の彌陀の本尊を見出したるは、其以前なる事いぢるし。さて本源寺は一旦中絶すといへども、治世の後玉泉院丸の地邊に更に再建して、本願寺末寺と稱す。三壺記等に御城後、町の末寺とある是なり。即ち今西本願寺別院にて、本源寺の寺號は稱せずといへども、其の實は本源寺なり。

○城地地名論

金澤城地は、往古は加賀郡の郡内なりしかど、亂世の頃より石川郡に屬し、石浦庄山崎村の地内にて、小立野山崎村の尾崎なり。故に古名をば尾山と呼べり。金城隆盛私記に、有尾山御山之二説。一曰。金城以山尾之故曰尾山。二曰。曆應中一向宗門建道場於此地。諸民尊敬之。故稱御山。由之三州土民。尾山爲金府之總稱也。とあり。菅家見聞集

には、昔は石垣・堀等もなく、山屋敷の地形にて、本願寺の末寺有之。其頃諸人出入して御山と呼べり。或説に、城地は白山の山尾にて、城地にて山終りける故に、終山とも又尾山ともいふ。と見れば、馬淵高定の武家混目集には、尾山といふは白山の尾續きといふ意。御山といふは本願寺の御山といふ意、金澤といふは武家城に成りて後の號なり。といへり。又松梅語園に、利常卿或時松坂檢校へ仰せらる。金澤城は昔一向坊主持ち居たる頃、下民ども御山といふとも、又小立野の尾崎なるに依りて尾山と呼ぶとも聞けり。本説如何と尋ね給ふ。檢校承り、小立野の尾崎なる故に尾山と申すが本説と承り候と申上ぐ。とあり。是正説なるべし。加賀古蹟考にも、小立野山の尾崎に道場を建てける故に、世俗尾山の御堂と呼べり。此道場を尾山の御堂といひならせしより尾山と呼び、また金澤御堂とも稱せり。といへり。平次按ずるに、加越圖評記・北陸七國志等に、蓮如上人越前吉崎の地を朝倉敏景に乞ひ請け、連枝一人差下し、道場を建立しけるに、國民御山と號して參詣恭敬す。と載せたり。吉崎の創立は文明三年にて、甚だ繁昌せし故

に、金澤城地の道場も同じく尊崇して、吉崎と同じく御山とは稱したるならんか。されど天正頃の古文書共に皆尾山とのみ載せられたれば、御山といふは吉崎の過聞にて、尾山を本説と松坂檢校が聞き傳へたるはさもあるべし。三州志來因概覽附録に、本願寺の釋徒推崇して加賀の御山と稱すと云ふ説は非也。石川郡三宮古記文和三年に既に御山の字見ゆ。然れば釋徒未萌前にて、長享より百三十年前也。察するに此の頃尾山とも御山とも書きしを、釋徒幸に御山と書き定むる成るべし。さて天正八年庚辰佐久間盛政御山を改めて尾山の字に作ると古記に見ゆ。然れども佐久間氏此の年新に尾山の字に造り出すにはあらじ。本願寺の徒長享以來御山と唱へ來るを以て、佐久間氏勝國の號を忌み、古號の尾山の文字に復する成るべし。天正前後の軍記に、尾山・御山互に相記して差別なき者も、敢て筆耕者の罪に非ず。其の頃の人各、信じ左袒するに任せ書すれば也。といへり。平次按ずるに、三宮古記文和三年に御山の字既に見ゆ、といへるものは、石川郡白山比咩神社に傳來せる舊記中に載せたる、文和三年七月十八日水引神人和与狀案に、所詮於